

Title	日・韓両国語の慣用的表現の対照研究 : 身体語彙慣用句を中心として
Author(s)	林, 八龍
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/42770
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	林 八 龍
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 15613 号
学位授与年月日	平成12年5月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	日・韓両国語の慣用的表現の対照研究 —身体語彙慣用句を中心として—
論文審査委員	(主査) 教授 前田 富祺 (副査) 教授 蜂矢 真郷 教授 真田 信治

論文内容の要旨

本論文は、現代日本語の「慣用的表現」の類型化の問題を考察するとともに、「身体語彙慣用句」を中心とした日本語と韓国語の「慣用的表現」の比較対照を試み、日本語・韓国語それぞれの特色を明らかにすることを目的としている。

本論文は、第一部「研究の方向及び先行研究」、第二部「現代日本語の慣用的表現の類型」、第三部「日本語と韓国語の身体語彙慣用句の対照研究」の三部によって構成される。400字詰め原稿用紙にしておよそ900枚ほどからなる。さらに別冊として、「日本語と韓国語における身体語彙慣用句例文一覧」(およそ、600枚ほど)が加えられている。

第一部は、第一章「研究の意義と方法」で「慣用的表現」の類型を考え「身体語彙慣用句」の位置付けを行い、第二章「先行研究」において、「慣用的表現」、特に「身体語彙慣用句」がこれまでどのように研究されてきたかを明らかにし、本論文の序説としている。

第二部では、「慣用的表現」の類型を分類するとともに、日本語と韓国語の「慣用的表現」の比較対照を行った。第一章では、「慣用的表現」の成立を検討している。ある一まとまりの表現が慣用的表現として成り立つためには、基本的に意味あるいは形態結合の面で、慣用性・固定性が認められるとともに、構成要素ごとの意味を越えて全体として一まとまりの意味を表すようになることが必要であることを述べる。第二章では、「慣用的表現」の分類を試みている。「慣用的表現」をそれ自体、意味・用法上で自立できるかどうかということから「自立的慣用表現」と「付属的慣用表現(複合助辞)」とに分け、さらに前者を文的レベルの「あいさつ言葉」「格言・ことわざ」と句的レベルの「慣用句」とに分けている。第三章では、第二章で示した類型の中心となる「あいさつ言葉」「慣用句」について、日本語と韓国語との比較対照を行っている。その結果、(1)日本語の「あいさつ言葉」が省略形として成立し定型なものが多いのに対し、韓国語では定型的な性格が薄く、場面や状況によって種々の形の使われること、(2)日本語の「慣用句」と韓国語の「慣用句」とで類似の表現になるものは一割程度にとどまること、などのことを明らかにした。

第三部は、「身体語彙慣用句」に対する日・韓両語における対照考察である。内容は大きく三つの章から成っている。まず、第一章では、「身体語彙」及び「身体語彙慣用句」の範囲の問題について述べる。「身体語彙」は、もともとなる身体部位の位置上の関係や特性に合わせて、大きく、「頭部」「胴体部」「四肢部」「全身部」の四つの部に分け、各部の中では日・韓両語に共通して用例の豊富な、主な語彙項目に限定して検討している。日本語では907例、韓国

語では626例を数えるが、「頭部」の慣用句が日本語では全体の48%、韓国語では50%を占めるなど各部ごとの比率の類似していることが注目される。第二章では、「身体語彙慣用句」の構成上、表現上の特性を考察している。その結果、(1)日本語と韓国語ともに「慣用句」となる「目」「口」などの語もあるが、日本語では「慣用句」となる「髪」「つむじ」など韓国語では「慣用句」にならないもののあること、(2)「顔」など日本語、韓国語に類似する「慣用句」の多いものと、「腰」など類似する表現のほとんどないものがあること、などが分った。第三章では、具体的な資料をもとに、日本語と韓国語における「身体語彙慣用句」に対する実質的な対照を行っている。これによって、日本語、韓国語のそれぞれが「目」「口」などの「身体語彙」に対してどのような意識を持っているか、共通する部分と相違する部分とを明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語・韓国語の慣用句、特に「身体語彙慣用句」を対照研究し、それぞれの実態を明らかにするとともに、特色を考えようとするものである。慣用句の研究はまだあまり進んでいない分野であり、特に韓国語における研究はほとんどまだ行われていない。そのような状況の中でそれぞれの言語の慣用句を整理し、特に「身体語彙慣用句」について細かな検討を加え、日本語・韓国語の慣用句の特色を明らかにし、その共通点と相違点とを考究したことは高く評価される。別冊として加えられた身体語彙表現慣用句例文一覧も貴重な整理であり、今後の利用が期待される。

「身体語彙」の分類や「身体語彙慣用句」の範囲の限定などなお考えるべきところもあるが、従来どちらかと言えば個別的な慣用句の意味・用法の記述にとどまっていたところを、韓国語の「身体語彙慣用句」と対照しながら全体を体系的に考究した点に特色がある。

もちろん、この分野における最初のまとまった研究である以上、なお今後に俟つところも多い。日本語と韓国語とで共通する部分と相違する部分があることについては、どうしてそのようになっているかが問題であり、慣用句表現が歴史的に社会的にどのようにして成立してきたかのことも検討する必要がある。また、計量的な見通しを述べた部分についても、さらにいろいろな面からの検討も必要であろう。

しかしながら、これらの瑕瑾は本論文の成果を損なうものではない。よって本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。